奈良・纒向遺跡で4つ目建物跡

卑弥呼の宮殿施設か

邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纒向遺跡で、東西約150メートル、南北約100メートルと推定される宮殿エリア内の東側に新たな建物跡（3世紀前半）が見つかり、市教委が6日、発表した。これまでエリア内の中央部分で出土していた卑弥呼の居館の可能性がある大型建物跡に関連する宮殿施設とみられる。

纒向遺跡で新たに見つかった宮殿施設とみられる建物跡（ポールで囲まれた部分）＝奈良県桜井市

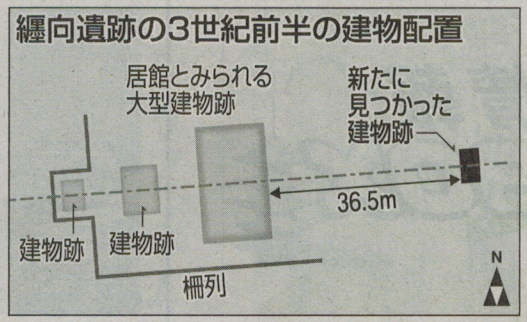
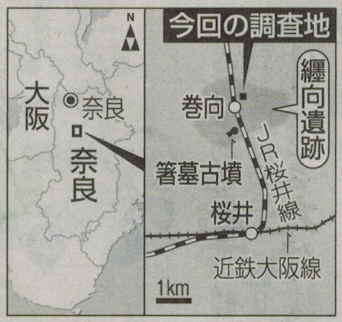
エリア内の東側で建物跡が確認されたのは初めてで、専門家は「宮殿エリアが東側に広がることが実証された」としている。

今回見つかった建物跡の規模は、東西3・4メートル、南北6・7メートル。直径15～20センチの柱が使われ、柱穴の1カ所には当時の柱が一部残っていた。

纒向遺跡では平成21年の調査で、宮殿エリア内の中央部分に、柵列に囲まれた大型建物跡（東西6・2メートル、南北19・2メートル）など3世紀前半の建物跡3棟分が確認されていた。今回の建物跡は、大型建物跡の東36・5メートルに位置する。用途は不明だが、3棟と同じ方位で、中軸線上に並んでいた。

纒向遺跡は初期ヤマト政権の邪馬台国の有力候補地とされる。中国の史書「魏志倭人伝」は、卑弥呼の宮殿について「楼観や城柵を厳かに設け、兵が守衛する」と記述している。

現地説明会は9日午前10時～午後3時。問い合わせは市纒向学研究センター（☎0744・45・0590）。

石野博信・兵庫県立考古博物館長（考古学）の話

「建物配置には計画性が感じられる。大型建物跡は、卑弥呼やその後擁立された台与の館の可能性があり、他に建物跡がないか、さらに確認することが必要だ」